

「中学生の居場所づくり」

前納寛乃氏（「中学生の広場」代表）

こんにちは、前納寛乃と申します。私は今「中学生の広場」という団体の代表を務めています。「中学生の広場」を始めましたのは、6年前のことです。現在の生徒数は、中学2年生2名、1年生2名の計4名です。

1年生の中には1回か2回参加して来なくなってしまう子と、継続して参加してくる子がいますが、これまでは来なくなった子の方が少ないです。その理由は、おそらくお母さんが後ろ盾になって「行きなさい」と言ってくださることと、本人自身が楽しんでいることの2つだと思います。最初に参観者にアンケートをとった時には、勉強したいと思って参加した子が多かったのですが、最近はこの活動がおもしろいからといって、お母さんに薦められて来ている子が多いように思えます。親から薦められて嫌々参加する子は、続かない場合が多いです。その辺が中学生の難しいところです。自分の意思で参加する子が減っているという現状です。

一人の男の子との出会い

私が6年前にこの活動を始めたきっかけは、一人の中学生との出会いでした。立川市には相談学級というものがありました。そこには不登校の子が来ることになっていますが、どうしても手に負えない子が一人入って来ました。その子との関わりは現在でも続いています。もしその子と出会わなかったら、私は多分この活動をしていなかったと思います。私がその子を助けた、という形になると思います。

その子は中学校2年生の時に入ってきました。アフリカ系アメリカ人との間に生まれた子で、目が鋭く、怖い印象を与える子でした。お母さんと学校との間の話し合いで、ここに来るのが良いのではないかということになりました。普通では考えられないくらい大変な子で、相談学級のどの先生が手を差し伸べても逃げてしまうような子でした。その子は母子家庭で育ちました。お母さんも肌の色の違う子を産んでしまったということで、自分の家族のところへ行くと嫌がられる存在でした。その子も、おじいちゃんやおばあちゃんから可愛がられていません。正月などにお母さんの実家へ行っても、疎んじられていました。

母子家庭ということで、自分が何とかしなければいけないという思いでお母さんは働いていましたが、子供を幼稚園に入れっぱなしで、夜中にならないと家に帰ってきません。彼は幼稚園の頃から一人ぼっちで、ペットとして犬と猫がいましたが、家においてテレビを見る以外にはすることがありませんでした。

お母さんはその子を私立の学校に行かせたいと思い受験準備のため塾に行かせました。元気のいい子で授業中立ち歩くので、それをすると親に殴られていたという話を聞きました。

私立の小学校に入りまして、友達にいじめられました。水筒で頭を殴られたり、椅子に縛りつけられたりしました。3年生のときアトピーがひどかったので、一時期医療養護施設に入りまして、しばらくして再び学校に戻ることになりました。しかし、もうその私立の学校には行きたくないということで、公立の学校に行くことになりました。

中学校に入ってから、非行に走りました。もともとお金がある家なのでワルのリーダーになって、他のグループとのケンカに備えて、ナイフを持ち歩くようになりました。しかし、彼はナイフを抜いたことはなく、ただ持っているだけで自分が強くなると言って携行していました。

親に暴力をふるわれていた彼は相談学級に入ってきて、私たちと話をしているうちに心が収まってきました。食べ物を作って一緒に食べたりして、やさしい先生方に馴染んできて、いろいろな話をするようになりました。それが先ほどまでの内容です。大変すさまじい人生でした。

実は、彼は私たちを試していたというのです。彼を怖がらずに接してくれたのは、今までで私だけだったそうです。苦しい時に、夜でも私のところに電話をかけてきて、それを私は何時間も聞いてあげていました。夫にも、そこまでやるのかと言われましたが、その子の話を聞いてあげられるのは、私しかいなかったのです。私が話を聞いてあげることで彼は気持ちを納めて夜出歩くことはなくなりました。

彼は私に、マンガの話をするようになりました。いくつもの本を紹介されましたが、それらに彼の生きる糧になる言葉が入っているのです。涙を流して何度も読んだ本もあったそうです。

それから、ビデオの話もしました。私たちはビデオというと悪いものばかり想像します。そういうものも見ているとは思いますが、彼が私に紹介したのはアメリカ映画でした。それらの映画はすべて、弱者が痛めつけられるような映画でした。親から放置された子が食べものを求めてパン屋から一切れのパンを盗み、刑務所に入れられるような映画もみました。10代の少年が監獄に入れられて虐待され、やせ細って出てくるというようなもので、私は見ているのが辛かったです。彼から勧められるので、初めは恐々見ていたのですが、そのうちに見入ってしまうようになりました。

そこにはアメリカが持っている正義について2つの考え方が示されていました。彼は、本当の正義を大人の社会は守っていないことを、私たちに突きつけるのです。こんな小さなことで、これだけ人を痛めつけているのだと言って、彼の怒りはとても大きいものでした。そして自分も同じ事をされてきたと言っていました。

この子を本当に真っ当にするためにはどうしたらいいのだろうと、つくづく思いました。彼の好きなものを一緒に見て、話をしたり聞いたりして、彼の怒りを理解していきました。その「怒り」は客観的に見れば権力構造にかかわっているということなどを話しました。そうすることで彼の中で「怒り」に普遍性があることを感じることはできたのではないのでしょうか。

彼は定時制高校に入学しました。授業中に多くの生徒がふざけたり、おしゃべりをしたり惨たんたるものなのですが、先生はそれを怒らないのだそうです。そのことに彼は腹を立てて高校をやめてしまいました。

また高校在学中にも友達とケンカをしたということで電話がかかってきて、その時には興奮していましたが、僕は殴らなかったと言っていました。私は、それはよかった偉かったと言って、彼の心を静めました。

その後も20歳くらいまであちこちでトラブルを引き起こし、もはや私の手には負えないと思い教会に連れて行きました。神父さんに話を聞いてもらうようになり、教会に出入りするようになりました。彼は自分なりに聖書をしっかりと読み込んで、私に講義をするほどになりました。

今では彼は宗教オタクと呼ばれているそうですが、悩みを抱えている人の悩みを聞いてあげているそうです。彼がまともになったのは、教会のおかげでした。2、3ヶ月に一度くらい電話がかかってきて、いつも私のことを心配してくれます。

子供を受け止めてあげる場所

この体験で、初めて立川市の現状が分かってきました。私が教えていたクラスの半分が母子家庭でした。どの子も不満を抱きながら生きています。その子たちが、どこかで支えられていればまともに勉強し、高校を受験しようと思うのですが、誰も相手にしなければその子たちは夜の世界に出かけて行って、友達を作ります。私はその学校に6年いましたが、他の学校に転任して次の年に、教え子が事故で死にました、という電話がかかってきました。先輩が持っているバイクを夜中に借りて出て行ってトラックと正面衝突をしたそうです。私たちは生徒の非行にどこまでストップをかけられるのか？こうした無力な体験をして、これは大変だと、つくづく感じました。生徒を夜の遊びから、どう戻すかということが、大きな課題です。

問題を抱えた子供たちを受け止めてあげる場所が必要だと思いました。どこでもいい、誰でもいい、一人でいいので、まず受け止めてあげることが大切です。これは、学校の先生も同じことを言っています。誰か一人がきちんと見ていれば、その子は悪くならないのです。たくさんの方が、そういう子を助けてあげようと思わないとなかなかできないことです。

夜回り先生のようなことをPTAがやり始めたところもあるようですが、今や夜回り先生だけが、その子たちの相手をしているのです。だから夜回りまで行かないように、夜回りする直前で中学生を救えるようにすればいいのです。

私は仕事をしていますし、家族もいますので、夜回りの仕事には手が出ません。でも、私も何か始めようという気持ちはありました。6年前に東京都から失業補償の補助金が各市町村に出たので、これを国分寺市民の共働事業に使おうではないかということで、事業の公募がありました。半年間補助金が出るのでやってみないかと、議員の方から誘われまし

た。それで土曜補習教室というものをやってみようという話になりました。企画が審査を通りまして、50万円の補助金をいただき、無料で土曜補習教室を半年間行いました。その間30人ほどの子供が来ました。私も教員免許を持った友達を集めて半年間教えました。

半年間の無料の時期が終わりまして、どうしようかと考えました。保護者の方に、わずかですが有料で今後続けてもいいですか、ということ伺ったところ、それでもお願いしたいと言われました。まだ法人化していませんが、小さなNPOとして土曜補習教室は3000円で月4回、試験の時期には日曜日にも開いています。

それだけでは子供は育たないので、私たちはこの企画を始める時に3つ目標を立てました。1つは、様々な困難を抱えている中学生が力強く日々活動をする手助けをすることです。これは私が最初に話したことです。2番目は、生活力を身につけることです。お母さんがいないからといって、ごはんを食べられないのでは困ります。自分で何でも作れるようにする、食べられるようにすることを、畑で作ることが食べることにつながるということまで含めて、目標にしています。3番目に、学力を引き上げることです。これも絶対に大切なことです。俺はできないんだ、もうだめなんだと、諦めてはいけません。この社会、諦めたら脱落ですから、中学校の時から諦めさせたら残酷です。少しでも勉強させると言う形で、土曜補習教室が始まってから今まで、本当にどの生徒もまじめによく勉強してきました。そんなに成績が上がっている子達ではありませんが、よく勉強しました。

野菜づくり等の活動を通じて

当会では勉強をしながら、畑作業をします。畑に出ると爽やかな風が背中を走って、とても気持ちよく感じられます。その感覚が「癒し」なのではないでしょうか。

写真で畑を紹介します。カボチャは私が生ゴミを畑に埋めていたら、勝手に生えてきたので、「一人生え」と呼んでいます。この畑は4年くらい私たちが使っていて、そこで生えた雑草を必ず畑に戻しています。4年間土を作ってきましたので、畑は結構肥えていて、ナスがよくできました。唐辛子もきれいに赤く色づきました。トウモロコシは鳥に食べられたり受粉がうまくいかなかったりしたのですが、結構おいしかったです。

今年は新しく畑を借りまして、キャベツが大きくできました。農薬の代わりに酢を薄めてかけたので青虫がつきませんでした。この間、大学生が植えたサツマイモを掘りました。これを環境祭りで売ったところ、1箱すべて売り切りました、子供たちも大変喜んでいました。

毎週、勉強が終わった後でみんなで自転車に乗って畑へ行き、草取りなどの作業をして、必ず何か持って帰らせます。普段手をかけていない畑なので見た目は良くないのですが、子供たちを中心にやれる範囲でやればいかなと思っています。それでも野菜はおいしくできるのです。

野菜を育てていることには幾つか目的があります。癒しの目的が一つ、もう一つは自然の肥料を使って、無農薬でも野菜ができることを教えたいということです。3つ目として、

今や農業が衰退しつつありますが、生活がうまく成り立たずいざとなったら、農業という手もあることを分かってほしいということです。ずっと土や生きものに触れていなくて突然触るとなったら嫌になりますが、嫌にならない程度に少しずつ触れさせて、雑草を見つけたら自発的に取ることができるようなしつけになったら良いなと思っていました。

私たちに畑を貸している農家は御夫婦で営む専業農家ですが、手が足りず援農ボランティアの方々の協力を得ています。夏の草取りは大変なので、私たちも畑を借りているお礼の意味で草取りの協力を行うことにしました。しかし私たちも忙しいので、卒業した高校生3名に事情を話したところ、わずかな謝礼でもやると言ってくれました。日程表まで組んで、ヘトヘトになるまで働いてくれました。畑が見事にきれいになっています。農家の皆さんも高校生の働きぶりに感心していました。

子供たちは体に染み込んだことはやれるという事を知りました。小さいときにいやいややらされていると、大人になったらやらなくなってしまう。楽しくやることをどう教えるかという点で、工夫が必要だと思います。

その他の実践活動

1. 合宿は長野県美麻村、豊丘町、それと桧原村の都民の森で行いました。
2. 自分たちで植えたひょうたんを乾かして、表面に絵を描きました。
3. 国立に国際交流の会というものがありまして、そこに参加した国連大学の学生たちと交流しました。
4. 畑をお借りしているお宅の庭を、イモ掘りのあとに掃除しました。
5. 生徒たちが作ったものをフリーマーケットで売る体験をしました。
6. ボランティア活動にも取り組んでいます。高校入試のときに、自己アピールカードを提出します。ボランティアを行うと入試に有利だという話も一時期ありました。国分寺市社会福祉協議会が春と夏に生徒を対象にボランティアを募集しています。私の生徒たちもボランティアをやりたいと言い社会福祉協議会に登録しました。老人ホームに派遣され、おじいさんおばあさんの話し相手を冷や汗をかきながらしていました。地域で手助けが必要な人たちの世話を自分ができるのだと言う事を学ぶいい機会になったと思います。

中学生は学校がすべてなので、自分が地域社会に貢献することができるということは、なかなか想像できません。親が地域活動に子供を連れて行くような家庭は別ですが、実際にはそのような家庭は多くはありません。ほとんど地域に出る機会がありません。そのためにボランティアはいい機会になり、またやってみたいという生徒もいました。卒業して高校2年になった今でも老人ホームのお手伝いをしている子もいます。

私は、中学生のボランティアは福祉関係に限らず、自分が進んで人のために何かをすればそれでいいのではないかと思います。国際貢献になるのですが、「ネパールの子供を支援する会」という会が国分寺市にあります。今は現地の政情不安で活動を休止していますが、4、5年前には文具を送っていました。国分寺市内の学校から集まった膨大な文具の整理を

私たちが手伝いました。その後の報告会まで行った中学生は、私たちの生徒だけでした。この活動は生徒が自主的に行ったものです。

最初から最後まで一貫して活動を行うことが大切だと思います。畑も、ボランティア活動もそうです。自分が関わったことが最後にはどうなったのかを確認する。そこを行動に生かして、彼らの心の中に染み込んでいったら良いなと思います。

古代から続く技術を学ぶ

今回ワークショップで使うために、羊毛を用意しました。最初から最後まで羊毛を自分の手で作ってみることがどういうことなのか体験していただきたいのです。自然素材のものを手作業で生活に生かすことが古代からどういうものなのかを考えてほしいのです。羊毛に限ったことでなく、食べ物もそうですが、一つのを製品にしていくことに大きな意味があると思います。少しずつ溜め込んだ活動が最後まで到達したところを皆さんに見ていただきたくて羊毛を用意しました。今回持ってきたウールは、私たちが生産者と共同開発した牛乳を作っている牧場で、無農薬の草を食べさせて牧畜をやっているところからとれたものです。

牛は低い芝草を食べるのですが、高い草があると草を食べられないそうです。そのため、まず牧場に高い草を食べる羊やヤギを放します。それから牛を放します。しかし牧場では直接生産のために羊を飼っているわけではないので、春に羊の毛を刈ると羊毛を燃やしているのだそうです。もったいないのもらってきたのが、今回の羊毛です。

草場にいる羊は毛がきれいなのですが、配合飼料で育った羊は毛に糞尿がついて汚いのです。今回はきれいなウールです。それを糸にし、草木で染めて、手編みでセーターなどにしています。フェルトにもしています。

子供たちを助ける

最後に、私に残された課題について話をさせてください。先ほど言いました夜回り先生になる前に助けるためには、いろいろな方法があります。

東京都の夢ファンドに私が考えたアイデアを応募しましたが採択されませんでした。私は、都営住宅の集会室をお借りして、学童保育が終わった 17 時から 21 時まで子供たちを預かる場所が必要だと思いました。預かるという少し変ですが、お腹が空いた子がそこへ行って自分でおにぎりを作って食べられる場所にしたいのです。

そこに 2 人くらいのボランティアが常駐して、来た子供たちと話をし、一緒におにぎりを食べるということを考えていました。子供たちが、一番お腹が空く時間が 17 時から 18 時ころですが、都営住宅に住んでいる家庭は母子家庭が多いので、お母さんたちは朝から晩まで働きます。そのため、子供たちは夜中まで何も食べられません。

食べ時に食べさせてあげるといふ、このたった 1 つの手伝いだけでもどれだけ子供たちが助かるのでしょうか。お金があれば外で何かを食べることができますが、お金も何も無

い子もたくさんいます。「なんという親だろう」と思うくらい子供を放任している親はたくさんいます。そこで、子供たちが「あそこ」へ行けば何かを食べさせてもらえる、そういう場所を点々と作るしかないと思います。

夜の街に行かせないために、「何しているの、勉強しなきゃだめでしょ。おばちゃんが見てあげるから、やっごらん」と言える場所が必要です。そこでは難しい勉強を教えるのではなく、できないところをできるようにしてあげるのはです。たとえば小学生の場合、お母さんが帰ってくるのが19時頃ですから、19時以降は対象を中学生にするとか、なんとかならないかと考えています。

ただし、一人ではできません。賛同してくれる人が何人かいることが何よりも必要です。川越にいる児童委員の友人も、勉強を見てあげる場所をはじめました。このように児童委員が動いてくれるといいのですが、なかなか連携がとれず難しいのが現状です。

とにかく、助けるとするのは本当に簡単なことです。お腹が空いていれば、それをいっぱいにしてあげればいいのです。心が満たされれば、その子は悪いことはしないのです。その役割を、昔は地域のおばちゃんがやってくれていました。そのような世界を取り戻さなければいけません。取り戻すことができなければ、作る必要があります。

質疑応答

質問者 A: 教育を行う場所は「学校」と「家庭」の2つと思っていたのですが、前納さんのお話の中でもう一つ「地域」が大きな要因であることがよく分かりました。子供の問題に対して、かつては地域が対応していましたが、現在それが衰えてしまったのか、それともかつては前納さんのお話になったような問題は存在しなかったが、家庭の問題を含めて最近新たに発生したのか、教えてください。

前納氏: 子供の問題は昔からずっとあったことだと思います。昔は家が狭く兄弟がたくさんいて、けんかばかりして育ちました。兄弟全員が幸せだったわけではなく、中には外へ出て行ってしまう子もいました。小学生の頃は親の言うことは絶対ですが、中学生は思春期で心の振幅が大きいです。振幅の幅が親に反抗する程度で収まっている場合はよいのですが、家庭状況が悪いほど外へ飛び出します。外へ飛び出した子を昔はどうしていたかという、誰も彼らと取り合わなかったのです。無視していました。児童福祉と言っても、児童施設は養護する子供でいっぱいでした。

家庭があって食うに困ることが無いのに家を出てしまうという子はたくさんいました。その子供たちは公園にたむろしたり、大人に怒られて逃げたりしていました。その程度でした。現在子供を家の中につなぎとめられている家庭は、40%くらいなのではないでしょうか。だから多くの子供は外が好きなのです。親だって働きに出て家にいないのですから、じっと家にいる訳がありません。街に明かりが灯っている場所が昔は少なかったので橋の下で悪いことをしていたということはあったでしょう。今はコンビニやゲームセンターと

いう、彼らの居場所があります。地域では不良少年の補導をやっているのですが、不良少年に引っかけられないけれども家にいない中間の子供もいます。「中学生の広場」がその子を受け入れています。中学生は放っておけば悪くなる、しかしまだ繋ぎ止めておくことができる年頃なのです。

質問者 B: 前納さんがおっしゃっていることには納得しますが、これからは教育委員会がどう関わっていくのかが課題になってくると思います。民間だけでやっていくのは難しいです。しかし、いろいろな企画は民間から出てくることが多いと思います。それをもっと行政が取り込んでくれないかと思います。福祉の問題とか、いろいろありますが、私は、一番国がお金をかけなければいけないと思うのは、教育だと思います。何がよい先生なのか分かりませんが、よい先生を育てることが大切です。しっかりした子供を作らないことには、日本の発展につながらないと思います。福祉も大切なのですが、現在、教育がどこかに追いやられている気がします。だから、前納さんのように目を向けてもらえない子供に目を注ぐことは大切だと思います。

前納氏: 学校教育にお金をかける話を言い出したらきりが無いですね。まだ 30 人学級にしてほしいという要求は通りません。子供たち一人ひとりが個性尊重の時代になりますと、1 クラス 40 人も見られません。半分の 20 人だったらと思います。教育にお金をかけないということは私に言わせると、まずクラス人数を減らせないことだと思います。現在先進国と言われる国では、1 クラス 25 人くらいです。日本では T&T の制度がありますが、それが上手く機能していません。T&T にするくらいならクラスの人数を半分にしたほうが良いと思います。

質問者 B: 私は「中学生の広場」の存在を知っていましたが、中学生たちは知っているのかなと思います。私の子供に話をしたところ、どうも知らなかったようでした。

前納氏: 年に 3 回ほど、国分寺市のすべての中学校に案内を配っています。先生の紹介で来てくれる子もいますが、お母さんの目に留まるのが本当はよいのです。教育委員会は補習教室をやっていることについて、あまり良い印象を持っていないと思います。もし教育委員会が補習教室をやってくれるのであれば、行きたいと思う人が多くなるのではないのでしょうか。公民館活動に端を発しているのですが、学校でも案内を配ってもらっていました。しかし、去年（2006 年）突然、私文書だということで学校から電話がかかってきました。後援も何も無いではないか、自分でやっているだけではないかという扱いになってしまうのです。それで私は社会福祉協議会と教育委員会の後援を入れて活動をするようになりました。今は年に 2、3 人がチラシを見て来ますが、その子たちが友達を連れてきます。生徒もあまり興味が無いようです。保護者の方も何か先入観をもって活動を見ているので、実際にお子さんが入ってみると、非常に驚かれます。

今、一番の問題は宣伝です。「中学生」は親に行けと言われるほど嫌なことは無いような年代ですから、やはり友達同士で友達を連れてくるのが一番よいのです。あと、できれば参加費を無料にして活動したいです。しかし現在、参加費 3000 円をいただいているから

こそ続けられているという実感はあります。

質問者 C: 大学生でも大学に来なくなってしまう学生がいます。世間話をするためでもいいから研究室に来て、と言ってもなかなか来てくれません。そういう学生たちのきっかけづくりをどうしたらいいのかなと思っています。2 つ目として、「中学生の広場」に来た子供たちとスタッフの方々との間には強い信頼関係があり、そこからコミュニケーションが生まれるのかなと思いました。活動日以外にも仲間同士で集まることがあるのでしょうか。3 つ目として、時間的にもエネルギー的にも大変な活動だと思いますが、スタッフの方々は一前納さんの知り合いの方が協力しているのでしょうか。スタッフがどのように集まったのか、教えてください。

前納氏: きっかけづくりは先ほど話した通りです。子供たちの人間関係ですが、仲間になっている子が来ていますので、とても仲が良いです。土曜半日一緒にいて、同じものを食べているので、ミニ家庭のような雰囲気になります。卒業した子たちも合宿に参加したいと言います。子供たちにとって「中学生の広場」とは、第 2 の家庭なのだと思います。卒業生も自発的に来てくれるので、中学生との間に、そこで新たな人間関係ができます。いたずら等で「いい加減にきなさい」と言いたくなるようなこともあります。当然怒ることもあります。そのことで決して終わるような人間関係ではなく、小さな家庭のような存在になっています。

スタッフについてですが、子供を通じて友人になった大人たちに、教員免許を持っているか聞いて回るところから始まりました。やはり土曜補習教室ですから教員免許を持っていることを基本とします。みんな子供を育てた方ですから私の考えに賛同してくださっています。その中でローテーションを組んでいます。ご主人が、畑が好きだといって、一緒に活動に参加してくれたりもします。とてもありがたいことです。

質問者 D: お話の中で、今の社会は諦めたら脱落するから、勉強することが大切だとおっしゃいました。私も少し前は中学生で、勉強は大人から押し付けられているものという気持ちがありました。なぜ勉強しなければいけないのかわからなかったのですが、しかし勉強しなければ脱落する、というジレンマを抱えていました。勉強をやりたくないという子の気持ちはどうなのだろうと思います。勉強したくないから大人たちが作った楽しい夜の街の世界に行きたくなるのも分かる気がします。学校側の態度にしても、教育のプロではない人が教育をやってはいけないような対応をすることについて、どうなのだろうと思います。

前納氏: 人間は多面的なので、勉強したくないときもあれば、遊びたい時もあります。ただ、人生は一つではありません。私はこの活動を自分が母親のような気持ちでやっています。いろんなチャンスを捕まえては、よいと思うことを子供たちに全部やらせています。体験するということが人生の歩みでなんらかの良い影響を与えていくのではないかと思います。勉強だってその一つだと思います。押し付けだとも言われますが、社会で生きていくための最低限の知識を得るという意味で、勉強も一つの社会的なルールだと思います。

だから勉強しないと、生きる力が得られないと思います。何のために勉強をやるのかを考えると、やはり自分の自己実現のためだということになるのではないのでしょうか。私も生徒が嫌だというときにはやらせませんが、ずっとやらない生徒は、一生懸命やっている子が見ていると渋々やります。勉強は最低ラインだと思います。一人ひとりを、きちんと育てることが一番大切だと思います。

(講演後のワークショップ)

羊毛を糸にする工程を体験しました。

草木で染めた羊毛の繊維を、ブラシでほぐします。ヨモギやクリ、サクラなどで染めることができます。化学染料でも、きれいに染めることができます。

ほぐした羊毛を、木の板を重りとしてつけた棒に巻きつけて、毛糸にしていきます。重りがついているので棒が回転する仕組みになっています。

糸を手編みにしてマフラーを作ったり、編み棒でセーターを編んだりします。空気を入れながらほぐし、毛糸にし、編んでいるので、身につけたときに機械で作ったものよりも暖かく感じられます。

編み物をするほかに、ほぐした羊毛を使ってフェルトを作ることもできます。違う色のフェルトに千枚通しなどを使って別のフェルトを絡ませることで、模様をつけることもできます。